

# 他宗祖師伝説

—各地の寺院にみる信者獲得の一手法—

Legends of Masters of Other Schools: A Method for Garnering Followers at Temples in the Various Regions

小野澤 眞 (ONOZAWA Makoto)

〈キーワード〉 宗教経済、祖師信仰、伝説、縁起、空海、法然、親鸞、日蓮、一遍

## 序

日本における寺院は古代、官寺・定額寺として国家の出先機関であった。ゆえに鎮護国家・玉体安穩を祈願するのが主務であり、庶民救済はむしろ忌避すべきことでさえあった。

しかし律令制（僧尼令）の崩壊、王朝国家の変容、都市・貨幣経済の進展（内的要因）、対外交流の展開（外的要因）などから鎌倉新仏教が登場。さらに自力救済の動乱の中世後期に入って鎌倉新仏教が室町・戦国

新仏教というべき実体性をもった教団として確立されてくるにおよび、仏教界ではさまざまな手法によって教勢の維持・拡大が図られるようになってくる。その最たるものが葬式仏教であり、それにともなう墓地経営・寺檀制であった。その萌芽は鎌倉期の律僧（光明真言土砂加持）・時衆Ⅱ時宗（臨終行儀）にみられ、それが全面に定着したのは江戸幕府による寺請制度の導入であった。しかしそれ以外にも、寺領は勿論、祈禱、巡礼、開帳、護符頒布、名目金（祠堂金）貸し付け、寺子屋、酒造（僧坊酒）、タバコ栽培（寺中煙草）、灸治療など、多岐に亘る方法によって寺院は檀・信徒を確保し錢貨・物品を獲得することに務めていたのである。

筆者はそうした仏教界の動向を経済活動として捉え、「宗教経済」史学という一つの視座に立ち学問上で分析の対象とすべきであると考えている。<sup>〔1〕</sup>

今回はその中でも、寺院による他宗派の宗祖を利用した集客についてみてみたい。門流意識が広がり、寺院本末制が強化されていくと、どの宗派も大なり小なり他宗を排斥し優位性を主張するようになる。鎌倉末の「鎌倉殿中間答」（史実か否かは稍疑あり）から安土問答や慶長宗論にいたる、浄土宗と法華宗との間で数百年におよぶ宗論は周知であろう。しかし各宗派は対立ばかりをしていたわけではない。近世以前には宗を超えた教学・人事交流がしばしばみられた。近世以降になると「宗祖」に仰がれた高僧たちを、他宗派の寺院が所縁の人物として喧伝する現象が広範にみられる。現代人の常識では意外だが、前近代におけるそうした事例は、宗教組織による宗教経済の事象として考えられるのである。

本稿はまず事例収集の研究ノートとし、大方のご判断を仰ぎたい。

### ① 鉄輪永福寺（大分県別府市）

日本最大の温泉郷である別府八湯の一つ、鉄輪温泉に時宗永福寺がある。鉄輪温泉開湯に関わったとされる

一遍の坐像が本尊の傍らにあり、戦後興された祭礼「湯浴み祭り」では一遍の功績を謝してその坐像を摸したものを温泉に浸して沐浴させる行事もある。

大分県公文書館蔵・明治十八年（一八八五）十一月十六日付「第二大區十四小區南鉄輪村松壽寺由来口上覺書」では、延享五年（一七四八）の地方文書を引いて建治二年（一二七六）鶴見権現（別府市にある鶴見岳を神格化した延喜式内火男火売神社）の教念により一遍が自作の像を安置したのが松寿庵、今の永福寺の起原であるとしている。

史実ではどうかというところと一遍が遊行で豊後府中（大分市）に来ていたことは『一遍聖絵』で明らかながら、温泉開湯は疑わしいといわざるをえない。ただ遊行二十一代他阿知蓮（在位一四九七〜一五一三）撰と伝わる『一遍義集』に「山ヲハ號ニス鶴見嶽」ト。（中略）又地獄ノ傍ラニ出ニシタマフ無寒無熱湯」トとあるので、伝説の萌芽は戦国期にはあったとみられる。その後遊行上人の公用日記『遊行日鑑』享保十八年（一七三三）三月九日条に「此処ニ一遍上人御開基温泉有り、一遍上人御影堂」があり、やがて一遍の幼名とされる松寿丸に因んで松寿庵と称し、石風呂（蒸し湯）を管理していた。ただ無住だったり境内墓塔をみると浄土宗鎮西派の僧が住み着いたりしていたこともわかる。本堂にあるくだんの一遍坐像も、印相をみるともとは法然ないし親鸞のもののようなものである。

同寺蔵・元治二年丑（一八六五）正月付「請書」によれば、客殿ができた際、本尊薬師の左に一遍像、右に親鸞像を祀り、親鸞像は大切に相伝してきたもので、住職交代のみぎりは鍵をかけて庄屋が預かったという。ただし一向宗の僧に客殿で法要をさせず、時宗の掟には背きません、と西国の時宗繪本山・七条金光寺（京都市下京区。現廃寺）に誓願した文書である。同じく寺には年未詳の版本『真宗開祖御真影略縁起』があり、それによると一九世紀初頭に親鸞像が永福寺（当時の名は松寿寺）に収まって裁判など紆余曲折があったが地元

民の堅い護持により今（明治後半カ）にいたることが述べられている。<sup>(4)</sup>

寺は一旦明治五年（一八七二）廢絶し同二十四年（一八九一）再興されているが、石風呂の入湯料だけが得分の無檀寺院だったのを、地元（温泉関係）有力者が真宗門徒から改宗し寺を支えた。またその後小倉欣浄寺（福岡県北九州市小倉北区）から入った住職河野家代々が親鸞信仰を宣伝することで寺の維持・拡大を図っている。今寺には親鸞帰洛満悦御真影、恵信尼坐像、同遺髪、同遺骨がある。恵信尼像は中世前期の優品であり、大正四年（一九一五）稲田西念寺（茨城県笠間市）から贈られたものという。ただし恵信講の領収証も残り、実態は購入か高額な志納金に対する返礼だったと考えられる。いずれにせよ、永福寺には今なお時宗より真宗門徒の参詣が多いようで、それに向けた対応が行われている。

## ②四国八十八箇所（四国）

四国八十八箇所霊場はいうまでもなく弘法大師空海（七七四〜八三五）を追慕しその足跡を確認するための札所である。一番高野山真言宗霊山寺（徳島県鳴門市）から八十八番真言宗系単立大窪寺（香川県さぬき市）まで四国全土に広がる。霊場開創千二百年というがその成立は近世であり、中世にまでさかのぼるものではない。しかし庶民信仰としてはおそらく最も人口に膾炙され、巡礼は「遍路」という固有名詞でよばれるほどである。

空海は真言宗の宗祖であるが、霊場寺院の宗派は多岐に亘る。

現在の八十八箇所のうち真言宗系以外を抽出すると、十一番臨濟宗妙心寺派藤井寺（徳島県吉野川市）、十五番曹洞宗国分寺（徳島市）、四十三番天台寺門宗明石寺（愛媛県西予市）、七十六番天台寺門宗金倉寺（香川県善通寺市）、七十八番時宗郷照寺（香川県綾歌郡宇多津町）、八十二番天台宗系単立根香寺（香川県高松市）、

八十七番天台宗山門派長尾寺（香川県さぬき市）である。廃仏毀釈以前は神社さえも札所に含まれており（納経所は別当寺）、さらに多様であった。

この中で七十八番郷照寺をとりあげてみる。神亀二年（七二五）行基が阿弥陀如来を本尊として道場寺を開創し、弘仁六年（八一五）空海により改宗、さらに正応元年（一二八八）一遍により時宗となる。元龜・天正の頃（一六世紀後半）兵火に罹り寺勢凋落するが高松藩主松平家により郷照寺として復興され、霊場に含まれた。ただ町教育委員会によれば詳細は不明。

現在の寺は公然と「宗旨・時宗・真言」「厄除けうたづ大師」を謳っている。旧寺号は道場寺という。道場とは寺院の通称であり、おもに時衆で用いられる用語である。一つの被包括法人が複数の包括法人に所属することはありえず、宗教法人郷照寺は時宗に包括されている。つまり宗旨が時宗・真言というのは自称にすぎない。浄土系の時宗に当然ながら厄除けを行う教理も修法も存在しない。寺に空海の伝承があつて霊場に包摂されたために、時宗や一遍ではなく真言宗や空海を前面にうちだすようになったのであろう。

四国は時宗が弱く（四国でわずか三箇寺）、当寺も明治二十年（一八八七）までは無檀寺院であつたというのが鍵となる。霊場として参詣客からの収入の方が安定していたのであろう。

### ③善通寺（香川県善通寺市）

善通寺は真言宗善通寺派総本山である。宝龜五年（七七四）に空海が生誕した地にのちに堂塔を建立。出自の佐伯氏の氏寺だったようである。空海ゆかりの寺として中・近世も武家から外護された。

境内には法然堂があり、法然逆修塔が祀られている。『法然上人行狀繪圖』卷三十六によれば、承元の法難（一二〇七）により土佐国に流罪が決し結局讃岐国に配流された時に善通寺に立ち寄った。寺伝ではこの時法

然が自らの爪髪を埋めた逆修塔を建立したという。ただし現在の形状は五輪塔の残片を積み重ねたような変則のものであり、鎌倉初期の同時代のものとはいえない。<sup>7)</sup>

親鸞堂には「鎌田の御影」が祀られている。東国を巡錫していた親鸞が、寄留していた下総国鎌田（東京都江戸川区）吉田源五左右衛門邸に自刻像を残し「法然が参詣した善通寺にこの像を送ってほしい」といい含める。しかし長らく放置され夢告によって延享年間（一七四四〜八）ようやく善通寺に寄進されたという。<sup>8)</sup>

善通寺宝物館（松原潔氏）から重要な教示をえた。まず同寺には今述べた親鸞縁起を記した、ともに年欠の「親鸞聖人略縁起」と「親鸞聖人鎌田御影略縁起」がある。前者は箱書から明治三十二年（一八九九）施入かとみられ、後者は筆者のみる限り書体は二〇世紀のものである。なお親鸞堂は法然堂よりはるかに巨大である。現親鸞堂の建物は一九七〇年代後半から八〇年代前半のもので、それ以前は不詳ながら、明治四十四年（一九一一）の境内図に「見真大師」（＝親鸞）と書かれた堂宇が確認できる一方、国立公文書館（旧内閣文庫）蔵の宝暦五年（一七五五）絵図にはみられないという。また親鸞像は専門家の見立てでは江戸後期製作と推定されるという。これらの情報から親鸞伝承形成の時期が類推できよう。

千葉県市川市にある浄土宗本願寺派了善寺にこれに対応する縁起が遺されている。<sup>9)</sup> 親鸞に自刻像を託された吉田源五左エ門の八代孫の佐太郎が蓮如に帰依し、慈縁と名のつて建立した寺であるという。

記元二千六百年 念房總叢書刊行會編輯『房總叢書』第六卷（同會・一九四一年）、四四六頁が引く一九世紀前半の『葛飾誌略』に応仁二年（一四六八）建立、吉田佐太郎の陣屋とするが佐太郎は正体不明とある。それから百年ほどのちの千葉縣東葛飾郡教育會編輯『東葛飾郡誌』（同會・一九二三年）、一二六四頁には足利持氏の臣で当地代官の吉田佐太郎陣屋が了善寺となり、佐太郎子孫が住職とある。ともに善通寺のことは出てこない。

#### ④法然上人二十五霊場

浄土宗の開祖に仰がれる法然所縁の地を巡拝するのが「法然上人二十五霊場」である。初見は延享四年（一七四七）『浪花寺社巡』「円光大師廿五所廻」であり、法然由緒地を巡参することを企図した京都の廓誉順起の弟子、大坂の順阿霊沢が、宝暦十二年（一七六二）、法然五百五十年遠忌（一七六一）などを契機に、霊場を設けて参拝したのが起原とされている<sup>10</sup>。霊場寺院には法然出身の天台宗など他宗の寺院が含まれるが、靈山正法寺（時宗旧靈山派・京都市東山区）が法然別時念仏の遺跡でありながら大坂講の意向で十四番から番付に外された例もあるという<sup>11</sup>。筆者は以前偶然に近畿地方のある霊場復活に立ち会ったことがあるが、寺院指定は変化をとげた旧跡を発掘することだから、さまざまに「大人の事情」があり、古態がそのまま再現されるわけではないのである。

現在の霊場のうち浄土宗（西山派・鎮西派）系以外を抽出すると、五番高野山真言宗勝尾寺二階堂（大阪府箕面市）、六番和宗四天王寺六時堂（大阪府天王寺区）、十一番華嚴宗東大寺指図堂（奈良市）、十三番北法相宗清水寺阿弥陀堂（京都市東山区）、十七番天台宗山門派二尊院（京都市右京区）、十八番天台宗山門派月輪寺（京都市右京区）、二十一番天台宗山門派勝林院（京都市左京区）、特別霊場天台宗山門派青龍寺（滋賀県大津市）である。浄土宗鎮西派（東山知恩院）主体の霊場として存続している。

#### ⑤大阪四天王寺（大阪府天王寺区）

四天王寺は大阪府天王寺区にある和宗総本山である。厩戸（聖徳太子）が創建した日本最古級の寺といわれ、和宗として独立した一九四六年までは天台宗山門派系統であったが歴史は単線ではなかった。太子信仰の聖地としてさまざまな宗派の宗祖、派祖が詣でたことでも知られている。昭和二十年（一九四五）の空襲によ

り一切が灰燼に帰し、現在の広大で壮麗な伽藍は全て戦後の再建にかかるものなのである。

その境内に見真堂、元三大師堂、弘法大師堂、阿弥陀堂の法然像などがある。

そこで、例えば二〇一二年春現在見真堂で配布している小さい縁起（観光案内書から転載力）をみると（ルビ略。紙数の都合で改行は「」で示す）、

#### 見真堂／第四番

創建年代未詳。／昭和四十八年（一九七三）再建。／元は役の行者を祀っていたが、後に見真大師（親鸞聖人）を安置したことから、見真堂という。／親鸞聖人が聖徳太子を深く讃仰され、しばしば四天王寺に詣でられた縁によりここに祀られることとなった。／堂内には正面に本尊阿弥陀如来、右に聖徳太子像、左に六字名号の掛軸を祀る。／御堂の東側には、親鸞聖人銅像を祀る。／南無阿弥陀仏／本尊ご真言／おん・あみりた・ていぜい・からうん

とあって、四天王寺では古くから親鸞を宣揚していたと記されている。

しかし大阪市立中央図書館蔵の版本のうち、元禄二<sup>己</sup>歳（一六八九）二月廿二日付『四天王寺がらん記』および元文二年<sup>己</sup>（一七三七）三月吉辰付<sup>『四天王寺  
伽藍細見名跡集』</sup>をみてみても見真堂などはまったく登場しない。年欠（元禄十一年（一六九八）カ）『四天王寺委細記』にもない。見真堂、元三大師堂が確認できた初出は、何と戦後の奥田慈應編著『四天王寺誌』（同寺・一九六三年一〇月）なのであった。

#### ⑥高野山金剛峯寺（和歌山県伊都郡高野町）

高野山真言宗総本山にして弘法大師空海入定の聖地とされる高野山金剛峯寺に、法然・親鸞墓がある<sup>12</sup>。

奥之院の入口にある熊谷寺（高野山真言宗）は、法然、親鸞、蓮生（俗名熊谷直実）ら所縁の寺という。



寺伝によれば、建仁元年（一一〇一）源平合戦の戦死者追悼法要が高野山で営まれた際、法然は特請を受け、弟子親鸞および関白九条兼実とともに登山したという。また法然は弥勒が龍華三会する暁に、同じく下生した空海と値遇しようと、五輪塔を奥之院の傍らに建立した。法然寂後、そこに弟子が分骨したのだという。さらに弘長四年（一二六四）親鸞三回忌に妻の恵信尼が、親鸞遺骨と名号、恵信尼像を寄進したという。

奥之院周辺には宗派関係なく中世から現代までの著名人の墓（正確には供養塔）が林立すること知られる。熊谷寺は④法然上人二十五霊場の番外札所となっている。高野山内にあつて同じ真言宗ながら、法然・親鸞を宣揚し他宗の参詣客を招き入れる役割りを担っている。

#### ⑦六角堂頂法寺（京都市中京区）

頂法寺は天台宗山門派系単立の寺。華道（池坊）発祥地としても有名である。

比叡山の堂僧であつた親鸞が、この寺の六角堂に百日間参籠し、九五日目の暁に女犯を認めた聖徳太子の夢想をえたとして、真宗においては聖地というべき扱いを受けている。

近年になつて建てられた境内親鸞堂には、親鸞が夢告を承けた姿を刻んだ「夢想之像」と参籠時の姿を自刻されたと伝える「草鞋の御影」が安置されている。

これらの像にまつわる詳細は不明だが、『山城名勝志』巻四、『都名所圖會』巻之一の六角堂の項に親鸞関係の記事はみられない。

#### ⑧円山安養寺（京都市東山区）

安養寺は時宗の古刹である。平安期から鎌倉時代にかけて東山のこの一帯は天台宗の寺門派や山門派の別所

のような意味合いの地であり、なおかつ葬送の墓域であった。円山（慈円山）は安養寺の山号であり、円山というだけで山岳ではなく寺そのものをさした。

その安養寺は八坂神社の裏、円山公園の最も奥まった場所にひっそりとたたずむ。門前には「法然両上人御旧跡吉水草庵／慈円山安養寺」と書かれた石柱があり、その隣に「法然上人念佛宣揚の地（三十数年間止住）／親鸞聖人御入信の地／吉水草庵」と墨書された木札もならぶ。さらに数メートル進んだ門には「法然親鸞両上人／（※紋章）吉水草庵」と書かれた提灯が両側に吊されている。紋章は時宗宗紋「隅切り三」だがほとんどの人の知るところではあるまい。階段を上がると本堂があり中は常に開放されている。内陣正面に「吉水草庵」と大書した墨蹟が掲げられている。揮毫したのは真宗大谷派二十三世法主大谷光演（一八七五～一九四三）である。その脇にも柱に『正信偈』から抜萃した「選擇本願弘惡世」「常覆眞實信心天」の一文が刻字されて両側に掲げられている。本尊は法然の念持仏だったという阿弥陀如来三尊でその脇壇向かって右に法然と左に慈円・親鸞の木造坐像が安置されている。親鸞像は昭和十四年（一九三九）作製で「信決定御満足の像」と称している。これらはこの寺が浄土宗か真宗の寺ではないかとの印象を参詣者に与える。市が建てた門前の木製案内板で細かい文字を熟読しなければ、ここが時宗であると気づくことはない。

また参道両側には狭隘な近世・近代墓地が展開するが、墓石をみると真宗の釈号や浄土宗鎮西派の誉号が目だつ。一九九六～七年頃の数回、住職田中明光氏に訊いたところ、「法然・親鸞ゆかりの寺ということで浄土宗や真宗の人たちが墓地を希望することが多い」「そうした人たちが我が寺の檀家になっても、古い法名と整合性をつけるため（時宗の阿号ではなく）釈号で法名を与える」との答えをえた。そのほかにも同師からは自身の母校が大谷大学であること、一部の概説書などで報恩講を実施しているとあるが今は行っていない（逆にいえば、かつては大谷派の日程で報恩講を行っていた）ことなども教示いただいた。

安養寺は親鸞が法然に入門した「前大僧正の貴坊」「源空聖人の吉水の禪房」(高田専修寺藏『善信聖人親鸞傳繪』卷一)の後身という。しかし「吉水」という泉のそばという地理条件と「前大僧正」こと慈円の住坊であったとの伝が合致するものの、吉水草庵と天台宗寺院を改宗したという安養寺とが系譜でつながっているかどうか確証はない。時宗寺院が法然を宣揚することは宗祖一遍の師筋であるから問題ないにせよ、親鸞をここまで宣伝するのは特異である。昭和十四年(一九三九)作の親鸞坐像や昭和十八年(一九四三)破の大谷光演の親筆などから、すでに戦前には親鸞古跡の寺院であることを鮮明にしていたことがわかる。<sup>13)</sup>

安養寺には塔頭が六坊あり、六阿弥と総称された。妻帯し副業として割烹料亭・貸座敷を営み京洛の人気名所であった。大石内蔵助良雄のよびかけで赤穂浪士が集合した円山会議は六坊の重阿弥で開かれている。廃仏毀釈で六阿弥が衰亡すると安養寺は困窮したに違いない。そんな時に安養寺Ⅱ吉水草庵説は渡りに船であったことは想像に難くない。

なお近世の安養寺に法然や親鸞の話はまったく存在しなかったことが観光向け地誌、安永九年(一七八〇)『郡名所圖會』卷之三から導き出せる(句読点筆者)。

圓山安養寺は長楽寺の北にあり、是も山門の別院にして、傳教大師の開基也。本尊の阿弥陀如来ハ安阿弥の作、建久年中に慈鎮和尚すみ玉ふ、其後時宗と改め、國阿上人住職せり。こゝに盲人源照といふ者、琵琶の妙曲を奏せしかバ天聽に達し、後小松院の恩寵を蒙り紫衣を賜ふ。是盲人紫衣の始といふ。源照はじめより當山に祈誓し、世に名誉あらん事をねがふ。然ふして願望成就せしかバ當寺の本堂を建立す。

### ⑨ 比叡山延曆寺(滋賀県大津市)

天台宗山門派の総本山である延曆寺東塔に大講堂がある。重要文化財だったが一九五六年に焼失したため、

寛永十一年（一六三四）に造営された坂本の東照宮讚仏堂を一九六四年に移築した。本尊は大日如来。その両脇に向かつて左から日蓮、道元、栄西、円珍、法然、親鸞、良忍、真盛、一遍の像が祀られている。各宗の祖師であり、各宗からの申し出で安置されるようになったという建前である。叡山が自宗の優位性を主張する恰好の光景である。もっとも、同時代資料である『一遍聖絵』『遊行上人縁起絵』によれば一遍は叡山には登っていないが、近世の『一遍上人年譜略』における修学記事を典拠としている。

比叡山の横川には定光院がある。叡山内だが日蓮宗の管理である。日蓮が二〇歳から一二年間修行したことに因んでいる。境内には大正十四年（一九二五）、祖師生誕七百年を記念し造立された日蓮立正安国像が建っている。一九九五年には日蓮宗から「宗門史跡」に指定された。普段は横川定光院護持顕彰会によって維持・管理されている。

同じ横川には得度した坊の跡地に明治二十五年（一八九二）「承陽大師之塔」が建つ。道元のことである。さらに一九八三年曹洞宗近畿管区により整備された。

根本中堂の東塔東谷の一五歳の法然が得度した霊跡とされる功德院跡地には、昭和七年（一九三二）、西山浄土宗楊谷寺（京都府長岡京市）住職の手により法然堂が建てられた。

また根本中堂の東塔北谷には蓮如堂がある。若き日の蓮如が修学した地に建てられたという。堂内には修行時代と、本願寺住持継職時の二つの像が安置されている。

#### ⑩五智国分寺・居多神社（新潟県上越市）

新潟県上越市五智に天台宗山門派国分寺がある。古代の越後国分寺は現在比定地に諸説がありよくわかっていない。上杉謙信が越後府中であり直江津の傍らの地に、永祿五年（一五六二）新たに国分寺を中興した。

親鸞は承元元年（一二〇七）流罪により越後に送られた。寺伝によれば時の国分寺住職は叡山で親鸞と同窓であったため、庵を提供し住まわせたといひ、これを竹之内草庵と称すという。そして刑を赦され関東に戻る親鸞が池に映った自らの姿を刻んだという木造坐像が親鸞堂に遺されている。

市指定文化財で像高八一・五センチメートル、室町中期かとされ元文三年（一七三八）『大谷遺跡録』<sup>(15)</sup>巻一によると元禄二年（一六八九）江戸に出開帳をしているというこの像は、しかしながら川村知行氏によれば、合掌の像容などから、国分寺に隣接していた時衆応称寺（称念寺。のち高田城下の寺町に移転）に関連する時衆祖師像であったと考えられるというのである。

越後の七不思議として、流罪当時の親鸞にまつわる怪異が伝えられている。<sup>(16)</sup> その一つとして国分寺にほど近い延喜式内社（一宮説あり）居多神社に片葉の葦伝説がある。神社に念仏弘通を祈念し一言放つと葦がたちまち片葉になったという。<sup>(17)</sup> この片葉の葦伝承は、民俗学では産鉄民の「片輪の足」（片足で轡を踏み続けるため萎える）を意味するといわれているので、語原は親鸞とは何の関係もない。<sup>(18)</sup>

詳しくは略するが、同じ西蒲原郡弥彦村の弥彦神社にも親鸞参詣譚と「親鸞聖人清水」や親鸞像が三、四体ほど伝わっている。困っている村人のために杖で泉を湧かせる話しはまさに弘法大師さながらである。なお居多と弥彦はともに越後一宮を争う仲だった。

このほか親鸞伝説生成の過程について井上鋭夫『一向一揆の研究』（吉川弘文館・一九六八年）に言及があるのは参考になるので附記しておく。

真宗が「神祇不拜」であるというのには一面に過ぎないことを示す伝承群でもある。

⑪信州善光寺・戸隠神社（長野市）

五智国分寺を發つた親鸞はその足で信州善光寺に向かったという。周知のとおり善光寺は無宗派の単立寺院で、天台宗山門派の「大勧進」および二五院の子院（うち五院は旧時衆）、浄土宗鎮西派の「大本願」および一四坊から成るといふきわめて特異な形態をとる。

善光寺には覚忠（園城寺別当）、俊乗房重源、空阿明遍、善慧房証空、然阿良忠、思円房叡尊、一山一寧、無人如導、道興、真盛ら他宗派の高僧も訪れたとされ、法然・親鸞・一遍も含まれる（信頼できる史料で参拝が確認できない者も少なくない<sup>(19)</sup>）。親鸞自身に参拝経験や善光寺信仰があつたかは不明であるが、現地では本堂内の「御花松」や浄土宗の子院・堂照坊の「親鸞堂」は真宗門徒の参詣を支える重要な記号となつている。かつては時衆の子院・寿量坊にも「親鸞自筆御影」があつたという。堂照坊では時の住職が親鸞と叡山時代の学友で、そこを宿所に親鸞が善光寺や戸隠山に巡拝したと伝え、その時の「笹字御名号」掛軸も遺る。一方善光寺と対で信仰された戸隠山にも念仏池や行勝院（現武井旅館）の名号などの足跡が伝わる。これらの名号がともに時衆流書体であつたりして、時衆の影がちらつくところが⑩の事例を想起させる<sup>(20)</sup>。中世前期、都市や有名寺社門前など人の集まる場所に好んで蝟集したのが時衆だつたことと無関係ではない。

超宗派を謳い諸国から来訪者がある善光寺において、参道途中に「親鸞堂」の額を掲げ（近代以降といわれ）、縁起を頒布する「商法」は誠に巧みといえよう。

⑫箱根神社（神奈川県足柄上郡箱根町）

本願寺系の親鸞伝記である『本願寺聖人伝繪<sup>(21)</sup>』の「箱根示現」段にこうある。関東から上洛する親鸞一行が日が暮れて困っていると箱根権現の神官に宿を供せられた。それは神官に権現の夢告があつたからだという。

そののち箱根権現は別当金剛王院が享和三癸亥年（一八〇三）正月付「相州箱根山安置親鸞聖人木像略縁起」<sup>(22)</sup>を広く配布していたことがわかっている。この縁起は箱根権現に残された親鸞自刻の真影の由来を述べ、真影を安置する別殿の再建の浄財を勧募する勧進帳（勧縁疏）の役目をもっていた。これにより再建された別殿は親鸞堂とよばれた。

慶応四年（一八六八）の神仏分離令により箱根権現は箱根神社となり、別当真言宗金剛王院東福寺は廃寺、伽藍堂塔は取り壊された。金剛王院の本尊阿弥陀如来のほか伝親鸞筆十字名号と親鸞像は、もと金剛王院末で同町内の真宗大谷派萬福寺に移された。なお親鸞像と十字名号は明治末年、浅草本願寺（現・浄土真宗東本願寺派本山東本願寺）の報恩講に出開帳したまま同寺に寄贈された。一方、箱根神社境内には一九六四年落慶した銅造親鸞立像が建てられており、宝物館では木造親鸞坐像が所蔵・展示されている<sup>(23)</sup>。

『新編相模國風土記稿』<sup>(24)</sup> 足柄下郡卷之八に金剛王院に親鸞堂があり、親鸞木像のほか自筆十字名号、阿弥陀如来絵像、竹杖を所有するという。興味深いのは「此堂は昔より私に造替する所にて、官の修理にかゝらず」とある点だろう。そのほか同書によれば、権現やその金剛王院に弘法大師関係の什宝も多い。他宗派の祖師を流布していたことがわかる。

### ⑬ 建長寺・無量光寺・妙傳寺（神奈川県）

神奈川県に大覚禪師蘭溪道隆（一一一三〜七八）を中心に、日蓮、一遍、顕智それぞれが関係する奇妙な伝承群がある<sup>(25)</sup>。一つ一つみてみよう。

鎌倉市にある臨済宗建長寺派大本山建長寺には現在、日蓮寄進の『法華経』、三足香炉、獅子形香炉、一遍寄進の燭台が遺されている<sup>(26)</sup>。そこでさかのぼって貞享二年（一六八五）『新編鎌倉志』<sup>(27)</sup> 卷之三を確認してみる

(その内容を継受した文政十二年(一八二九)『鎌倉攬勝考』卷之四もほぼ同内容)。ルビは原文マ、。

法華經 壹部一軸。紺紙金泥。日蓮ノ筆也。袖紙ノ繪モ日蓮ノ筆也ト云フ。八ノ卷ノ末ニ。金泥ニテ如レ此

ノ判アリ。又ツギメノ二モ有。(中略)

勝上嶽<sup>シヤクゲ</sup> 方丈ノ北ノ高山ヲ勝上嶽ト云。開山ノ坐禪窟アリ。昔シ開山此窟中ニテ坐禪シタマヒシトナリ。

今窟中ニ石地藏アリ。又傳ヘ云フ。禪師此ノ窟中ニテ坐禪ス。一遍上人來視テ詠<sup>ワド</sup>レテ歌<sup>ウタ</sup>ヲ云。躍リハ子。テ

フシテダニモカナハヌヲ。イ子ネムシテハイカ、アルベキ。禪師聞<sup>キ</sup>テ之<sup>ノ</sup>ヲ。倭歌作<sup>ク</sup>テ答<sup>コタ</sup>ヘテ云ク。躍リハ

子。庭<sup>ニハ</sup>ニ穗<sup>ホ</sup>ヒロフ小雀<sup>コソメ</sup>ハ。鶯<sup>ウ</sup>ノスミカライカ、知<sup>シル</sup>ヘキ。此時上人。禪師ニ參シテ。阿誰<sup>タソ</sup>ノ話<sup>ワ</sup>ヲ受テ大

悟スト云フ。窟ノ右ノ側ラニ上人坐禪セシ窟有。是故ニヤ。禪師三百年忌ノ辰。遊行上人ノ衆徒三百餘

員。宿忌半齋ニ出仕シテ。昭堂ノ前ニテ躍リ念佛執行セシトナリ。一遍上人號<sup>ハ</sup>知眞坊。正應二年。八

月二十三日ニ寂ストナリ。其時ノ宿坊妙高菴ナリ。又禪師。甲州東光寺ニ在<sup>アル</sup>日。信州諏訪<sup>スワ</sup>ノ明神現シテ

師ニ謁ス。師鎌倉ニ歸ル日。神送り來ル。藤澤ニ至テ。師止<sup>ト、マ</sup>ン事<sup>ユル</sup>ヲ許シテ遊行ノ鎮守タラシムト云傳

フ。七月廿七日。藤澤ニ諏訪ノ祭アル是ナリ。(後略)

因みに「阿誰ノ話」とあるのは、宋代の公案集『無門關』第四十五の「他是阿誰」という題の公案と思われる。

このように近世前期の段階で日蓮・一遍が建長寺と関係していることを伝えていたことがわかる。近代になるとどうか。同寺什宝目録<sup>(28)</sup>から気になる遺宝を抽出してみる。なお数量は法華経が八軸とある以外は全て各一点ずつである。用字は原文マ、。

秘佛薬師・行基菩薩、地藏尊小像・恵心僧都作、杉谷奥院辨天・弘法大師作、禮状・日蓮上人筆寫、法華經・日蓮上人筆、平釜・日蓮上人在寺所用、三本足香爐・日蓮上人寄附、獅子成燭臺・一遍上人寄附、不動尊



像・弘法大師筆、不動尊・弘法大師作、硯石・弘法大師所持。

右をみてみると――まず禪宗とは無関係な祖師たちの名が列挙されているのが本稿の視点からは注目されるが――、『新編鎌倉志』から二〇〇年ほどの間に日蓮・一遍所縁宝物が大幅に増えていることがわかる。伝承を補強するための「工作」が行われたのであろうか。

しかしこの喧伝は建長寺だけが行っていたわけではない。初期時衆教団最大の道場であった当麻無量光寺（神奈川県相模原市南区）の正史である元禄四年（一六九一）『麻山集』（巻）上に「同大覺禪師（一過）ニ謁シ玉フ之事」が短いながらも立項されている。什宝の項に「鐵鉢、是レハ元祖大覺禪師ヨリ傳ヘ玉フト云フ、中古紛失ス。」とあり、官撰地誌の天保十二年（一八四一）『新編相模國風土記稿』高座郡卷之十の什宝一覽にも鉄鉢はない。ただ現在宝蔵にある龐大な文化財の中に古びた四個の鉄鉢がある。いつの間にか「出現」したのであろうか。寺が宗政機関に提出した遊行寺宝物館蔵・大正三年（一九一四）十一月付『甲号明細帳』（二）に、文永八年（一二七一）に鉄鉢は鎌倉で大覺禪師に謁して贈られたものと記されていて、二〇世紀初頭時点で存在を確認できる。

一遍大覺禪師問答譚は一七世紀後半に流布しはじめたと考えてよい。（三）なおこれらとほぼ同時期の元禄十五年（二七〇二）『本朝高僧傳』（三）卷六十八に「陀嘗參大覺禪師于建長二」（陀＝他阿真教）とあることから、一遍の弟子で時衆教団の事実上の開祖といふべき真教が一遍に置き換えられることもあったようだが、時衆の祖が禅の高僧に参禅したとする構図は変わらない。

ところで、無量光寺にはこんな伝承もあった。

文永八年（一二七一）佐渡に流罪になる日蓮が、寺と相模川を挟んで対岸にある厚木市上依知の本間連蓮館に泊まった。その頃一遍は無量光寺の前身の庵にいたため、叡山修行時代の縁故から、日蓮を慰問したとい

う。これにより無量光寺と重連館が寺院化した日蓮宗妙傳寺に關係が生じ、互いの祖師忌法要に出席していたという<sup>(34)</sup>。実は本間氏館跡の所伝は妙傳寺含め近在の日蓮宗の蓮生寺、妙純寺の三箇寺が主張する。妙傳寺としては同時代の一遍が訪ねてきたことにすることで、信憑性を高める効果があったのかもしれない。これらの説話は到底史実とは考えがたいが、無量光寺を實際に開いたと推定される他阿真教は、北条一門の大仏一族と親しく、大仏家の有力被官がその本間氏なのであった。他阿真教は大仏宣時だけでなく本間源阿弥陀仏にも送った消息の内容が今に伝えられている。筆者は大仏氏・本間氏が初期時衆教団・当麻道場無量光寺の有力關係者（開基・檀越かは不明）と考えている<sup>(35)</sup>。日蓮一遍邂逅譚そのものは後代の成立にせよ、その土壤には相模本間氏（分流は戦前の日本最大の地主といわれた酒田本間家となる）の存在があつたのである。

大覚禪師、一遍、日蓮の三者をつなぐ存在をあえて想定するとすれば、本間氏館跡近くの厚木市金田建徳寺が臨済宗建長寺派であることは手がかりとなるうか。この寺は『新編相模國風土記稿』<sup>(36)</sup>「愛甲郡卷之三では開山大興禪師（正安三年（一三〇一）歿）、開基本間重連。鎌倉ノ室町期の宝篋印塔・五輪塔群（市指定有形文化財）がある本間一族の墓所を有す。つまり本間氏を結節点に、建長寺大覚禪師、無量光寺一遍、妙傳寺日蓮が相互に連環するのである。

さらに真宗高田派の第三代である顕智（一二二六〜一三一〇）の伝記である高田専修寺十八世円遵徳猷の撰による明和二年（一七六五）『高田三祖傳』<sup>(37)</sup>「第三祖井東上人傳」に次のようなものがある。「康元元年<sup>(一三五六)</sup>。遊履鎌倉。偶見大覚禪師。每出三言語。咸與佛心一合。禪師深器之。附拂子以爲信焉。」と。

本来厳しく対立してきた念仏、禪、法華の祖師たちが交流をもったという伝承は、もとより史実とは考えられないが、その利用を図った人々がいたということが浮き彫りとなる。

⑭ 調神社 (さいたま市浦和区)

調神社は県都にある延喜式内社であり、中山道浦和宿の南端に位置する。この社の南西角にあるケヤキの古木は「日蓮上人駒繋ぎのケヤキ」とよばれている。

日蓮が佐渡流謫の道すがら社頭を通りかかると、名主青山家の妻女が難産に苦しんでいた。そこで日蓮はケヤキに馬を繋ぎ、曼荼羅を掲げ安産の祈禱すると無事に男子が出産できたというのである。「調神社の七不思議」のうちの五番とされている<sup>(38)</sup>。

さて史実に即してみる。まず前述のように日蓮が依知の本間氏館に滞在したのは本人の「土木殿御返事」<sup>(39)</sup>などに明記された史実だが、そこから佐渡までの行程は記されていない。鎌倉街道上道を北上したと思われる。つまり浦和から一〇キロメートル以上西を通り、浦和近辺に来ることはまず考えにくい。中山道の浦和宿ができたのは慶長七年(一六〇二)以降である。そして文政十三年(一八三〇)『新編武蔵國風土記稿』<sup>(40)</sup> 足立郡巻八の調神社の項に日蓮がらみの記述はない。また別当寺は新義真言宗(現真言宗豊山派)玉蔵院が兼帯しており日蓮宗ではなかった。近世に社頭を中山道を通過するようになってから成立した説話ではないかと考えられる。しかも近世でも終盤であろう。

⑮ 笠森寺 (千葉県長生郡長南町)

天台宗山門派別格大本山笠森寺は笠森観音ともよばれ、坂東三十三箇所之三十一番札所である。延暦三年(七八四)最澄が開いたとされている。巨大岩石の上に四方懸造で建つ特異な形状の本堂であり、重要文化財に指定されている。現在の堂は天正(一五七三〜九二)・文禄年間(一五九二〜九六)の再建と認められるという<sup>(41)</sup>。

この堂の一室に日蓮「参籠の間」がある。特徴のない小部屋である。戦前の伝承によれば建長五年（一二五三）三七日間（三×七＝廿一日間のこと）参籠したといい、日蓮の自筆『法華経』も伝えられているとい<sup>(42)</sup>う。また現在の伝では七日間の参籠に修正されている<sup>(43)</sup>。元龜二年（一五七二）同寺の行讃が著した「日蓮上人参籠笠森寺由来」によれば、その後も日蓮が笠森観音を信仰し続けたとあり、戦国期に伝承が確認できる稀有の例である。なお同寺には伝日蓮和歌扁額（文政六<sup>未</sup>歳（一八二三）六月銘）や日蓮墨田五郎時光対面図絵馬（狩野安信（一六一四～八五）筆・制作年不詳）が現存する<sup>(45)</sup>。このように早い段階から笠森寺は日蓮伝承を流布させていたことがわかる。

一方、周辺の法華宗寺院にも笠森寺との関係が伝えられている。隣町の茂原市にある日蓮宗本山藻原寺（旧妙光寺）所蔵『常在山妙光寺草創由来留書』（寛延三年（一七五〇）五月）には、小松原法難（文永元年（一二三四）から逃れた日蓮が、墨田五郎時光に導かれて笠森寺に参拝し、それを聞いた領主齋藤兼綱が館に招聘して妙光寺の元を築いたという。また藻原寺に隣接する地に建つ法華宗本門流大本山鷲山寺も縁起書『青表紙』にて、小松原法難後に墨田五郎の手引きで笠森寺を参詣した日蓮が、領主小早川内記の保護を受け、のちに鷲山寺を建立したという。

このほか長南町の日蓮宗本詮寺など周辺の法華宗寺院に日蓮笠森参詣譚が伝わるという。笠森寺に伝わる日蓮伝承と藻原寺・鷲山寺に伝わる日蓮伝承とは設定が二〇年近く異なるが、天台宗別格大本山笠森寺と日蓮宗本山藻原寺・法華宗本門流大本山鷲山寺が相互の存在をうまく利用して自らの寺の来歴を語っていたことは本稿のいい事例となろう。

さらに付け加えると、これらの伝承に大いにからむ、日蓮が立教開宗した聖地とされる日蓮宗大本山清澄寺（千葉県鴨川市）は戦後まで長らく真言宗智山派であった。同寺の公式サイトによると「大正期に入り日蓮聖

人の銅像が完成したことでお参りの信者さんが増え、真言宗智山派と日蓮宗との間で改宗の話し合いがもたれました。そして昭和24年、当山は日蓮宗に改宗し宗門直轄の大本山として現在に至ります。」としている。

### 総括——跋にかえて——

時宗開祖とされる一遍が真言宗最大の聖地、高野山に参詣した史実は知られている。一遍は法然の法系を引くが、信頼高い同時代資料『一遍聖絵』では「高野大師」として空海が類出するように、尊敬していた。当時の時宗は独立宗派ではなかったからまつたく問題ない。勿論、法然も親鸞も正確には「天台僧」であり——例えば本願寺が門跡寺院として独立性を確保するまで、公式には真宗は天台宗の一部であったから——④法然二十五霊場に天台宗の寺院が含まれようが、親鸞が天台宗の⑦六角堂に参ろうが矛盾はないのである。その反面、室町・戦国新仏教としてその流れを引く教団が地位と経済力を高めてきたのは上述のとおりである。中世後期以降の宗派意識や本末制度が確立後に存在する、他宗派の祖師を利用する数々の事例は異色といえる。しかし寺院経営のためには、敵<sup>レ</sup>すら活用する、というのが、本稿でたどった遠慮ない他宗祖師の利用から透けてみえてきた。特に、中世後期以降真宗門徒・法華檀徒が増え、しかも彼らは妙好人に象徴されるように篤信であったから、親鸞や日蓮信仰を糧に門徒をよびこむことは他宗寺院にとって良い経済効果をもたらした。

文化九年（一八一二）〈文政元年（一八一六）〉にかけ諸国を旅した日向国の修験者、泉光院野田成亮が旅日記『日本九峰修行日記』<sup>〔47〕</sup>を遺している。そこから読みとれる特徴は、一人旅をする成亮に対し、一向宗（真宗）・法華宗（日蓮宗）の檀家たちが示した不寛容であった。一向宗・法華宗は一神教に近い教義（専修念仏、

不受不施・専持法華)をもつため、生活態度においても排他性を帯びざるをえない。

しかし本稿でみてきたように、実態は他宗はお構いなしであった。真宗・日蓮宗側でさえ、他宗を利用したりされたりすることで拡大に努めていたことがわかった。皮肉にも宗派が画然としそれぞれが蝸壺化するようになってから、史料上はむしろ他宗の祖師を利用することが目だつようになり、それは戦後にも続く(⑤⑨)。そして参詣する側の檀家もわが祖師のことになると他宗寺院でも許容していたのである。<sup>(48)</sup>真宗についていえば、親鸞参詣伝承と親鸞自刻像が一对、ないし親鸞堂(見真堂)を含め一組になっている型がみてとれる。

それとは別に弘法大師信仰・真言宗の超宗派性には改めて驚かされる(②③⑥)。高野聖による密教教理(祈禱)の現世利益を介した貴紳衆庶への訴求力も一因であろう。

他宗祖師の利用には、根底に「他宗の開祖も参詣に來たわが寺は名刹だ」という論理がある。決して他宗を対等な関係におくのではない。『法燈行状』から沢庵著『玲瓏集』<sup>(49)</sup>にいたる、一遍の法灯国師心地覚心(臨濟宗法灯派祖)への参禅譚がある(大覚禅師とする<sup>(50)</sup>はその派生形力)。念仏聖が禅僧に屈した例として広く流布させられたようであり、かなり人口に膾炙していた。史実ではありえない説話が造作されたのである。

他宗祖師の信仰を利用した例とはやや異なるが、他宗派の名刹門前にわざわざ寺院を構える新仏教寺院は少なくない。名刹の集客力に便乗しようとしたのだろう。善光寺や四天王寺の周囲にはさまざまな宗派の寺院が混在して一つの寺町を構成している。例えば善光寺の背後の山には往生寺、善光寺参道に西光寺があり、ともに高野山と同じ刈萱堂の信仰を鼓吹する浄土宗鎮西派の寺である。善光寺内にも鎮西派の子院があるものの寺域の内外ではまったく関係がない。善光寺縁起に直接結びつきを求めない真宗や曹洞宗寺院も周囲にいくつもある。一方四天王寺周辺にも他宗寺院が多く、例えば延享元年(一七四四)になって設けられた時宗円成院は、いつの頃からか一遍に淵源を求めようになっている。もちろん後代の仮託と考えられる。

註(1) 拙著で詳論したように、そもそもどの各宗派史を回顧してみても——弘法大師は特殊例としてそれ以外は——、遠忌法要の開始からもわかるように、祖師信仰が生起するのは戦国期以降である。各宗派で祖師信仰が展開されるにおよび、他宗派でもそれを認知することで利用していかうという動きがみられるようになった。伝承のほとんどは近世中葉以降(場合によっては戦後)に成立したようであり、祖師信仰確立後の伝承生成で時系列は合う。祖師信仰がほとんどなかった天台宗の宗祖最澄、臨済宗の栄西、曹洞宗の道元らについては、他宗も利用しようとした痕跡はない。

以上、他宗祖師信仰利用の様相を追ってきた。寺も経営のために必死だったが、一方民衆も必死であった。巡礼者には生業としての「職業遍路」もいたという。網野善彦流に言えば、もはや職人としての遍路である。そして札所も住民もそれを容認していた。宗教活動を信仰心の一言で美化せずそうした諸相を弁証することが、宗教経済史学の要諦である。

なお、手始めとして管見に入った事例の集積を主眼としたため、事例紹介も考察も物足りない印象を与えたやもしれぬ。ご寛恕いただきたい。いざ調べ始めると、類例が膨大にみつかる気配に狼狽した。そこであくまで筆者の専業とする時衆や浄土系を中軸に据えることとした。その浄土系でも、親鸞ゆかりの日野法界寺(真言宗醍醐派別格本山・京都市伏見区)と日野誕生院(浄土真宗本願寺派)、石山寺(東寺真言宗・滋賀県大津市)の蓮如堂のことなど、まだまだ紹介しきれしていない。

最後に、古賀克彦、常磐井慈裕、細川武稔、湯谷祐三、安養寺(田中明光)、市川歴史博物館(菅野洋介)、永福寺(河野憲勝)、大分県公文書館(高橋)、総本山善通寺宝物館(松原潔)、長南町教育委員会(風間俊人)、妙傳寺、無量光寺(飯田覚隆)の各氏・各機関のご教示・ご協力に感謝したい。

註

- (1) 小野澤眞『中世時衆史の研究』（八木書店・二〇一二年）、六三七頁。宗教活動を思想營為としてではなく経済行為として捉え、寺家を公家・武家とならぶ経済セクターとみる歴史学の視座を提示した。
- (2) 時宗開宗七百年記念宗典編集委員会編集『定本時宗宗典』下巻（時宗宗務所〈山喜房佛書林発売〉・一九七九年）、四四八～九頁。
- (3) 圭室文雄編『遊行日鑑』第二巻（角川書店・一九七八年）、一三二頁。
- (4) 櫻井成昭「近世・近代の時宗と浄土真宗——永福寺と親鸞聖人像——」『永福寺資料』『瀬戸内海西部における阿弥陀信仰の歴史の展開の研究 研究課題番号 26526098』（大分県立歴史博物館・二〇一二年）
- (5) 禰宜田修然『時宗の寺々』（禰宜田私家版・一九八〇年）、四一〇～一頁。禰宜田修然・高野修編著『時宗寺院名所記』（梅花書屋・一九九四年）、二二一～二頁。
- (6) 公式サイト「厄除けうたづ大師 郷照寺」(<http://www.yakuyoke.org/index.html>)
- (7) なお法然塔にふれた海邊博士「西讃岐における中世石造物の特質——善通寺旧境内所在の石造物を中心に——」『日引』第11号（石造物研究会・二〇〇八年）がある由だが、披見の機会がなかった。
- (8) 善通寺市企画課編集『善通寺市史』第一巻（同市・一九七七年）、六三二～四頁。総本山善通寺編集『善通寺史 善通寺創建一二〇〇年記念出版』（五岳・二〇〇七年）、八〇～一頁は法然教団側の史料である『法然上人絵伝』にみえる法然善通寺参詣についてだけふれ、親鸞についてや法然堂・親鸞堂に言及はまったくない。
- (9) 境内案内板による。
- (10) 浄宗會編『元祖法然上人靈跡巡拝の栞』（同會・一九五九年）、富永航平著・法然上人二十五霊場會編『法然上人二十五霊場巡礼——法話と札所案内——』（朱鷺書房・一九九四年）
- (11) 山本博子「法然上人二十五番霊場における番外札所」『日本印度学仏教学会編集』『印度學佛教學研究』第五十六卷第一号（通巻第113号）（同會・二〇〇七年）、三六～七頁。
- (12) 研究書・寺史などで、総本山にとつて「外伝」というべき特異な縁起が記述されることはほとんどなく、調査は困難をきわめた。ここでは筆者個人の訪問・伝聞や熊谷寺公式サイト「高野山熊谷寺」(<http://www.kumagait.jp/>) などネットの情報



報によった。

- (13) 時宗教学研究所編集『時宗寺院明細帳』8 (同所・時宗宗務所・二〇〇八年)、六五〜七六頁をみると、一九世紀の明細帳(寺から府や宗門に差し出した書上)類では自らの寺を法然・親鸞が出会った場と簡単にふれるだけで、宣揚や信仰の対象とした形跡はみられない。
- (14) 前掲註(12)に同じ。
- (15) 川村知行「越後の時宗と称念寺藏一鎮上人像」上越市史専門委員会編集『上越市史研究』第2号(同市・一九九七年)
- (16) 日野巖『植物怪異伝説新考』(有明書房・刊行年記なし)(一九七八年九)
- (17) 花ヶ前盛明『親鸞聖人と五智』(花ヶ崎私家版・一九七三年)
- (18) 柴田弘武『風と火の古代史―よみがえる産鉄民』(彩流社・一九九二年)
- (19) 坂井衡平『善光寺史』上・下(東京美術・一九六九年)
- (20) 前掲註(1)書、二九七〜八頁。
- (21) 真宗史料刊行会編『大系真宗史料』特別卷(絵巻と絵詞)(法藏館・二〇〇六年)
- (22) 箱根神社々務所編纂『箱根神社大系』上卷(同所・一九三〇年)、三五四〜五頁。
- (23) 箱根神社『箱根神社―信仰の歴史と文化―』(同社社務所・一九八九年)
- (24) 雄山閣編輯局編輯『大日本地誌大系 新編相模國風土記稿二(雄山閣・一九三三年)、一〇五〜六頁。
- (25) 小野澤眞『時宗当麻派七〇〇年の光芒―中世武家の信仰から近世・近代庶民の信仰へ―』日本史史料研究会選書8(同会・二〇一五年)
- (26) 建長寺史編纂委員会編集・高木宗監『建長寺史 開山大覚禪師伝』(大本山建長寺・一九八九年)、口絵頁。
- (27) 蘆田伊人編輯『大日本地誌大系』新編鎌倉志・鎌倉攬勝考(雄山閣・一九二九年)
- (28) 内田亮坪編輯『建長寺什寶目録』(内田私家版・一八八四年)、一〜三頁。
- (29) 雄山閣編輯局校訂『大日本地誌大系』新編相模國風土記稿三(雄山閣・一九三三年)「  
小野澤眞「相模原市南区・当麻山無量光寺調査詳報―時宗当麻派研究の基礎として―」相模原市教育委員会教育局生涯学習部博物館編集『相模原市史ノート』(第11号)(同市・二〇一四年)
- (31) 時宗教学研究所編集『時宗寺院明細帳』5(同所・二〇〇五年)、一五〇〜一七二頁。

- (32) 近世初頭の随筆集「老人雜話」(国文学研究資料館および早稲田大学図書館サイトに写本画像掲載)にもこの説話は確認でき、巷間知られていたようである。「一遍上人年譜略」(續群書類従)第九輯上、續群書類従完成會・一九三三年)は一遍大覚禪師和歌問答説を紹介した上で、一遍が鎌倉に入る弘安五年(一二二二)よりも前の同元年に大覚禪師は死去しているの「後人偽説也」と鋭く指摘する。
- (33) 佛書刊行會編纂『大日本佛教全書』第一〇三冊(同會・一九二三年)、八六〇頁。
- (34) 座間美都治「相模原の民話伝説」(座間私家版・一九六八年)、五二〜四頁、禰亘田修然・高野修編著『時宗寺院名所記』(梅花書屋・一九九四年)、一一七頁。ただし現無量光寺住職・妙傳寺寺族らによると現在は関係なしと。大正三年(一九一四)『甲号明細帳』によると、無量光寺に伝わる福祿寿画像は文化六年(一八〇九)妙傳寺三十八代日伝より寄贈とある。
- (35) 前掲註(25)書
- (36) 雄山閣編輯局校訂『大日本地誌大系』新編相模國風土記稿三(雄山閣・一九三三年)、二〇一頁。
- (37) 妻木直良編纂『真宗全書』35(藏經書院・一九一四年)、三四五頁。
- (38) 青木義脩「調神社」浦和歴史文化叢書4(浦和市郷土文化會・一九七八年)
- (39) 立正大學宗學研究所編纂『昭和<sup>昭和</sup>定本<sup>定本</sup>日蓮聖人遺文』第一卷(總本山身延久遠寺・一九五二年)、五〇三頁。
- (40) 蘆田伊人編輯『大日本地誌大系』新編武藏風土記稿七(雄山閣・一九三二年三月)、二四六〜七頁。
- (41) 重要文化財笠森寺觀音堂修理委員會編纂『重要文化財笠森寺觀音堂修理工事報告書』(同委員會・一九六〇年)、三頁。
- (42) 大森金五郎『<sup>隨感</sup>隨感<sup>隨感</sup>史傳史話』(文友社・一九二五年)、四七四〜五頁。
- (43) 市川智康『日蓮聖人の歩まれた道』(水書坊・一九八九年)、二九〜三〇頁。
- (44) 長生郡教育會編纂『長生郡郷土誌』(同會・一九一三年)、九七〜八頁。風間俊人氏が寺から聞いた話しでは、戦中・戦後の無住期に散佚したらしいとのことである。
- (45) 茂原市立美術館・郷土資料館編纂『郷土資料館企画展図録 門前町茂原と日蓮聖人』(同館・二〇〇一年)、二頁。
- (46) 公式サイト「千葉県鴨川市 日蓮宗 大本山 清澄寺オフィシャルサイト」(<http://www.seichoji.com/>)
- (47) 鈴木棠三校注「日本九峰修行日記」宮本常一・谷川健一・原口虎雄編『日本庶民生活史料集成』第二卷(三二書房・一九六九年)
- (48) 千葉乗隆「信濃真宗寺院成立の系譜」宮崎<sup>宮崎</sup>博士還暦記念會編纂『真宗史の研究』(永田文昌堂・一九六六年)
- (49) 小林円照「玲瓏集」大倉精神文化研究所編『新版日本思想史文獻解題』(角川書店・一九九二年)